２　挫折した木樋水道

明治初（1868）年、灯台建設のために日本に招かれた英国人土木技師のブラントンは、明治３（1870）年、「横浜の良水計画案」を神奈川県令（のちの県知事）に提出しました。この計画は、沈殿ろ過した水に圧力を加えて鉄管で給水し常時供給する、近代式水道計画としては日本最初のものでした。しかし、良質な水を早急に供給しなければならなかったため、長い工期を要し、莫大な費用がかさむこの計画は採用されませんでした。

そこで明治４（1871）年、横浜商人の有志、大倉喜八郎ら 10 人が共同で横浜水道会社をおこして、木樋（もくひ）水道建設を願い出ました。多摩川からすでに取水していた稲毛川崎二ケ領用水（灌漑用水）を水源として利用し、地中に木の樋（とい）を埋めて水を通す計画でした。

木樋水道は、明治４（1871）年に着工され、明治６（1873）年に完成しました。鹿島田村から横浜まで 16km を木樋で導水し、各町へは道路に大小の木樋を埋設して給水しました。数か所の汲み上げ用井戸を町内に設け共同で使用することにし、専用の井戸を設ける人は自費で工事を行うことになりした。料金に関しては、明治８（1875）年、内務・大蔵省から

個々の使用者との契約という新しい方式の料金取立ての許可指令が届きました。明治 12（1879）年、1 井戸 1 か月当たりの使用料金 5 円を徴収することになりました。しかし、施工後まもなく漏水が始まった上に、木樋の割れ目から塩水が混じり、汚水がしみこんでしまうなどして、横浜に到達するまでに飲用に耐えないものになってしまいました。

　このような水の汚染や料金の徴取などの問題から、木樋水道は半年で経営に行き詰まり、神奈川県に委ねざるを得なくなりました。神奈川県は明治 10（1877）年から明治 12（1879）年にかけて大改修を施しましたが、その後も修繕や改修に追われ続けます。ちょうどこの頃チフスやコレラなどの伝染病がたびたび大流行し、その予防対策として有効な新式水道の必要性が強く叫ばれ始めました。

おもな都市の近代水道創設状況

横浜	明治 20（1887）年 10 月
函館	明治 22（1889）年 9 月
長崎	明治 24（1891）年 5 月
大阪	明治 28（1895）年 11 月
東京	明治 31（1898）年 12 月